

平成26年度

第17回「ちゅうでん児童文学賞」贈呈式のご報告

今回の応募総数は 196 作品で、昨年度の 152 編を大幅に上回りました。事務局としましては、大変嬉しい限りです。それからもうひとつ、応募者のなかに、過去最年少となる 10 歳の男の子を含む小学生 2 人、中学生 1 人という、まさに児童・生徒と呼ばれる層からの応募があり、その一方、80 代のベテラン勢が 7 名もいらっしまったことには、選考委員の先生方からも驚きの声があがりました。

ご応募いただいた作品は、年齢、性別、職業など、応募時にいただいた情報は一切伏せた状態で選考を行います。本年は、8 月末の応募締切後から約半年間をかけて選考を重ね、その結果、4 編の作品が受賞作と決定いたしました。

平成 27 年 3 月 8 日（日）には、名鉄ニューグランドホテル（名古屋市）で贈呈式・記念講演会を開催いたしました。その際の様子を、簡単にご紹介させていただきます。

大賞	『流星ドッグ』	ながす みつき さん
優秀賞	『青の宮！』	森埜 こみち さん
優秀賞	『ママとはげザウルス』	今村 恵子 さん
奨励賞	『八日ぞう』	一星 裕子 さん



受賞者の皆さま

(左から、優秀賞：今村さん、大賞：ながすさん、優秀賞：森埜さん、奨励賞：一星さん)

「第 17 回 ちゅうでん児童文学賞」贈呈式・記念講演会

【開催日：平成 27 年 3 月 8 日（日）】

天候にも恵まれたこの日、200 名を超える皆さまにご来場いただき、「第 17 回ちゅうでん児童文学賞」の贈呈式と記念講演会を開催いたしました。

まず初めに、当財団理事長の高原昌弘よりご挨拶をさせていただきました。当文学賞を支えてくださっている選考委員の先生方、受賞者の方々はじめ、応募者の皆さまへの感謝の気持ちを、この場を借りて述べさせていただきました。

<理事長挨拶>



早いもので、「ちゅうでん児童文学賞」も第 17 回を迎えました。今年、応募数が非常に多く、196 編の作品が届き、その中から、大賞 1 編、優秀賞 2 編、奨励賞 1 編の合計 4 作品が受賞となりました。

大賞を受賞した作品は単行本として出版しておりますが、過去、私どもが出版させていただいた作品の中には、小学校の指定図書に

選定されたり、NHK で取り上げられた作品もあるなど、大変ありがたく思っております。

私事で恐縮ではございますが、先月 14 日から 15 日にかけて、福島に桜を植えるプロジェクト（ふくしま浜街道・桜プロジェクト）にボランティアで参加してまいりました。一年前にこのプロジェクトを主催されています NPO の代表とお会いしたことがきっかけです。プロジェクトは、復興のシンボルとして、2 万本の桜を約 160km に渡って植えるというもので、未来を担う子どもたちのために、30 年後の故郷に桜を贈るというものです。

私は、一年前に単行本として発刊された第 15 回大賞作品の『いっしょにアンベ！』を読んでおりまして、これは、東日本大震災を舞台にしたものであります。「アンベ」というのは、東北地方の方言で「いっしょにやろう」という言葉です。「いっしょにがんばろう」というメッセージが込められている一冊ですが、その本のなかに被災地の桜が出てきます。ラストで主人公が「あの桜はどうなったんだろう」というシーンが出てきます。親友に「いっしょに見に行こう」と主人公が言って終わるのですが、プロジェクトの話聞いた時、私にも何かできないだろうかと思いました。

よく考えてみますと、NPO の「未来を担う子どもたちへ」については、私ども財団の設立主旨と同じであり、同様の主旨の事業を展開しているわけです。自分も東北の復興に関し、何かできないかと考えておりましたなか、これもひとつの御縁なのかなと思ひまして参加させていただいた次第です。当日は、300 人のボランティアの方々と一緒に 1,200 本の桜の苗木を植えてまいりました。思いますと、結果的にこの作品『いっしょにアンベ！』に背中を押された気がします。

本を読んでおられますと、何かしら人の心を動かすようなきっかけを、本からもらっている気がします。それがまた、その先、人の心を豊かにするのではないかなと思っております。

この気持ちを原動力にこれからもますます頑張っていきたいと思っておりますので、今後とも、私どもの事業についてご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

最後になりますが、児童文学に携わる皆さまのますますのご活躍を記念いたしまして、簡単ではございますが、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

次に、選考委員の先生から選評をいただきました。

(今江祥智先生と長田弘先生は、ご都合によりご欠席となりました。)

<鷺田 清一 先生>



選考委員を代表しまして、選考にあたっての経過を報告したいと思います。

まず、受賞された4人の方々おめでとうございます。

受賞された方々の作品は、いずれも描写力や表現力が優れており、ぐいぐいと引き込まれました。物語の展開に紆余曲折があつて、人間というものを肯定するに至るプロセスはとても読み応えがありました。

ただ、選考委員の共通した意見として、受賞作に限らず、少しピクチャレスクになりすぎていないかなという感想を持ちました。ピクチャレスクというのは、描写が絵によりかかりすぎではないかという意味です。児童文学はやはり、言葉の力、言葉の厚み、あるいは濃やかさというものを、最後まで‘ことばの力’で成り立たせて欲しいなと思いました。

大賞を取られた、ながすみつきさんの作品『流星ドッグ』は、人間の弱さ、あるいは残虐さというものをしっかり描いています。そしてそれを潜り抜けて、主人公が本当の勇気を得るまでのプロセスが見事に描かれています。イノシシとの死闘のシーンとか、イノシシの牙で傷を負った愛犬の手術シーンは、迫真力に満ち、どれほどの資料にあたって書かれたのだろうと思ってびっくりしていたのですが、先ほど聞きましたら、ご本職が獣医さんだったんですね。

人間の弱さ・残虐さというのをかなり突っ込んで描きながらも、最後に、勇気にたどり着く。それをセンチメンタルに流されることなく描き切っている作品だと思います。

それから、副主人公というべき犬の名前が「ショパン」を文字って「食パン」というんですね（関西ではこれを「ショクパン」ではなく「ショッパン」と発音します）。そういうウィットも面白かったです。

最後に、一つ。3名の選考委員からですが、タイトルの『流星ドッグ』は、もうひとひねりして欲しかったなと思います。それと、他の委員の先生は抵抗なかったんですが、「ママとはげザウルス」という作品、このタイトルには私だけが抵抗を示しました。(笑)

長田先生におかれましては、選評を書面にてお預かりしておりましたので、事務局長より代読させていただきます。

<長田 弘 先生>

最終選考会での講評から

長田 弘

今回の選考対象作品を読んで、ほぼ共通して感じたことは一つ。それはどの作品についても、価値ある存在、知恵ある存在として語られるのが、主人公であれ、ほんのチョイ役であれ、現実の世界ではともすれば、価値のない存在、意志のない存在として扱われがちな、人里離れたところに暮らしている老人だったり、あるいは、この世にいないはずの妖怪であったり、幽霊であったりすることでした。

シングルマザーの母親と暮らす物語でも、興味あることに、別れて別に住む父親の存在が「そこにはない存在」なのに、「そこにいる存在」として語られることも少なくありませんでした。そのような、それぞれの作品のなかで、ここにはないはずの存在が、ここにいるのが当然のように、存在感あるものとして語られているのが、とても印象的でした。

大賞作品の『流星ドッグ』についていえば、この作品を読み終わった後、「これで決まり」と思いました。今回の選考対象作品のなかで、出来過ぎと言いたいほどに図抜けた文章力を感じさせ、ほぼ満点。正統派として、とにもかくにも読ませます。

圧巻なのは、イノシシの群れに突然襲われる場面。想像で書かれていると思いますが、イノシシの荒い息が伝わってくるようで、ぐーっと読ませきる描写も迫力があるし、ただの駄犬の野良犬のはずが、本当はきわめて由緒ある闘犬だったというところにしても、けっして唐突でなく、むしろそうだったんだと頷かされる。

もう一つ。シングルマザーの母親が学校みんなに仕事を誤解され、夜の店で働いていると噂されている。にもかかわらず、主人公は弁解しないで、ずっと耐えてゆく。耐えることで、自分の心を強くしてゆく。さらに、もう一つ。野良犬がすみかにしていた場所も、どこにでもある神社が野良犬の逃げ場所とされていること。昔から子どもたちにとって、神社の境内というのは、日々、そういう心の逃げ場所的などころにもなってきた場所であったからです。

難点を言えば、本になるときは、タイトルは変えた方がいいと思います。せっかくこれだけいいものを書いているのに、最近のテレビドラマのタイトルからの連想ぐらいにしか思わなかったらまずいでしょう。どんなタイトルに変えてくれるか、それも楽しみです。



選考会にて (2015年2月)

次に、受賞者の皆さまからもお言葉をいただきました。

【大賞】 ながす みつき さん 作品名『流星ドッグ』



今回思いがけず、このような大きな賞をいただき、さらに、単行本出版という形にさせていただけるということで、望外な喜びを感じています。本文学賞に関係しているすべての皆さま、並びに選考に携わった先生方に深くお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

今回の受賞作は、数年前からずっと私の心のなかで育てていた物語です。酷評を受けたタイトルなんですけれども、『流星ドッグ』は、流れ星のように短い夏を駆け抜けていった犬を表現しているつもりです。確かに、「流星ワゴン」という番組があり、少しかぶっていますね。

私の使わせていただいているペンネーム「ながす みつき」については、実は、私には二人の娘がおりまして、この二人の娘の名前からつけております。

児童文学を書き始めた頃は、まだ娘も小さい子どもだったですけれども、今は、大学生と高校生に成長しました。幼い頃は、私が書いた小説を読んで喜んでいたのですが、今では、読むどころか私の方を見向きもしません。しかし、今回は、渾身の受賞作です。出来の悪い娘たちも襟を正して正座して読んでくれることだと思います。

小説を書くということは、孤独な作業です。今回の受賞は、小説を書き続けるということのモチベーションやメンタルの面で、すごくプラスになったと思います。この受賞が、今後この本を読んだ子どもたちの糧になることを願っております。

本日は、どうもありがとうございました。

【優秀賞】 森埜 こみち さん 作品名『青の宮！』



このたびは、すばらしい賞をいただきありがとうございました。私が書いたのは、『青の宮！』という作品です。一言でいえば、カエルが空を飛んだという話です。書くきっかけは、カエルの声が聞こえなくなったなということでした。

私は、埼玉に住んでいます。少し前までは、田んぼがあって、カエルの声が聞こえました。夜になると、ワ〜ッとカエルの声が聞こえたんですが、今はもう聞くことができません。カエルはどうしたんだろうと思って少し調べました。そしたらちょっと面白い記事がありました。

3年ほど前の記事なんですけど、皇居周辺の池でオタマジャクシが大発生したという記事でした。気持ちが悪くなるほどの大発生だったんです。でも、オタマジャクシは捕獲されることはありませんでした。なぜかという、そのオタマジャクシは絶滅が危惧されているカエルのオタマジャクシだったからです。

そのとき思いました。カエルは気が付いたんじゃないかって。「緑の濃い皇居なら安全だ。皆で大挙して卵を産みに行こう」と考えたかもしれない。

人間のすることは、本当に自然に影響を及ぼすし、他の生き物を絶滅に追いやることも多々あると思うんですが、生き物は、ただ黙って、絶滅に追いやられることはしないと思うんです。

日本には、アサギマダラという海を渡るチョウがいます。海を渡るトンボもいます。陸が見えない海を陸を目指してどうやって飛ぶことができるんだろうって思いますが、でも、やって

のけます。私たちのすぐ隣では、生き物たちがダイナミックに生きている。そのエネルギーを感じたいなと思って書き続けました。「青の宮」は、カエルの名前です。空を飛ぶことに挑戦した、カッコいいカエルです。

選考委員の先生方に、そしてスタッフの皆さんに心よりお礼申し上げます。そして、物語を書かせてくれた「青の宮」にも感謝しています。ありがとうございました。

【優秀賞】今村 恵子 さん 作品名『ママとはげざうす』



本日は、誠にありがとうございました。

私は、塾で講師をしております。小学生と中学生に勉強を教えています。仕事柄、子供たちの学校の出来事だとか悩みなんかも身近にいる塾のおばさんという感じで話してきてくれます。今回の話は、そういう子供たちの話をヒントに生まれました。

子どもたちは、小学校高学年や中学生で、それぞれに悩めることがあります。とりあえず話せば済むようなことばかりです。「みんな悩んでいることは一緒だよ。時間が経てば解決してくれるんだよ。」と声を掛け、みんな一緒というような気持ちが伝わればいいかなと思っていました。

私は、書くのがあまり早くないので、今回の物語は1年かかりました。1年書いているうちになんだか收拾がつかなくなってしまう、ちょっとパソコンを開けるのが嫌だな、と思うことありました。でも今、ここにこうして受賞して立っていて、「ああ、諦めなくてよかったなあ」と本当に思います。こういう賞を思いがけずいただいたので、これからも書き続けるのをやめない、諦めないことをやめないぞと思います。私にとって今回は大きな賞です。

私は、北海道に住んでいます。今回、この暖かい名古屋まで旅行をさせていただきました財団様、そして選考委員の皆さまに感謝しております。今日は本当にありがとうございました。

【奨励賞】一星 裕子 さん 作品名『八日ぞう』



本日は、このようにすばらしい賞をいただき本当にありがとうございました。

私は、普段このような晴れがましさと無縁の生活を送っておりますので、久しぶりにスカートとヒールの靴を出しまして、勇んで今日名古屋まで来たんですが、駅で見事にヒールが折れてしま

いまして…。寒いのに朝から大汗をかいてしまいました。こういう格好が普段からできるようになりたいと改めて思いました。

私が書いた「八日ぞう」という話は、私の住む地域に伝わっている話なんですけれども、毎年、年の瀬の忙しい時期になりますと目ひとつ小僧というのが地域に現れまして、それぞれの家のあら捜しをして回ります。そして、それぞれの家の悪いところを閻魔帳につけて、そしてそれを地域の道祖神に預けて帰っていきます。でも、その帳面というのは、人々にとっては、甚だ都合が悪いものですので、年が明けると人々は‘どんど焼き’の日と一緒に燃やしてしまいます。という、少しかわいそうな、気の毒な目ひとつ小僧の話を書かせていただきました。

日本には、このようにたくさん心惹かれる題材があるなあと思います。これからもそういったものを広く発掘しながら、末永く書き続けていきたいと思っています。今回の受賞は本当に力になりました。ありがとうございました。

贈呈式の後には、鷺田清一先生による「わからないことを大切に」と題した記念講演会を開催いたしました。

冗談を交えた楽しいお話に、時折、来場者から笑い声もあがり、終始和やかな会となりました。



大変残念なお知らせですが、私ども児童文学賞を第1回目から支えて続けていただきました選考委員の今江祥智先生が、去る3月20日にご逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたしますとともに、「ちゅうでん児童文学賞」における永年の功績に対し、心より御礼申し上げます。

最後になりますが、平成27年度「第18回ちゅうでん児童文学賞」の作品募集が始まりました[締切：8月31日(月)]。

全国の書き手の皆さまからのご応募を、スタッフ一同、お待ち申しあげております。

2015年4月吉日
公益財団法人ちゅうでん教育振興財団